

◆ 基礎情報

計画名	専門家との協働によるアート指向ファッション教育の推進
実施責任者	家政学部被服学科 古川 貴雄
対象者	家政学部被服学科 67人(4年生 32人、3年生 20人、2年生 15人)
実施期間	2025年4月～2026年2月

◆ 取組み概要

本計画では、プロジェクトプロデューサーやビューティ・ウェルネス分野など学外の専門家と連携し、多様なステークホルダーと協働した実践的な活動を通して、設定した課題を解決するために不可欠なチームワークやリーダーシップを身につけることを目的とした。2015-2017に行なわれたKALECOは、演劇をテーマに様々な分野の専門家の指導のもと、多くの学生が協働する先駆的な共立リーダーシップ教育の取り組みとであった。演者だけでなく、舞台衣装・装飾の制作や照明・映像などの演出も学生が担当するし、常にチーム全体を意識しながら各自のリーダーシップを発揮するという点で、このプロジェクトではKALECOをモデルとしてた。ここでは、被服に関する専門的な知識・技術を基盤に、心身を表出するメディア、及び、パフォーマンスアートとしてのファッションに焦点を当て、能動的・主体的に課題を解決する能力を身につけ、自ら設定した目標を達成することを目指した。プロジェクトの実施にあたり、コミュニケーションデザイナーの博報堂DY 小林 祐美子 氏、メイクアップアーティスト 水島 広美 氏、ウォーキングインストラクター仲村 涼 氏ら専門家にご協力いただいた。

◆ 取組み全体の流れ

被服学科専門教育科目でProject Based Learning(PBL)を行っている被服学ゼミナールA・B_04(前期)とアセスメント科目である卒業制作(通年)の履修者が主たる対象ではあるが、成果発表会・卒業制作発表会の運営には、これらの科目を履修していない被服学科の1年生、他学部や短期大学生活科学科の学生も協力者として参加しており、特定の科目に留まらないプロジェクトとなっている。

前期の被服学ゼミナールA・B_04では、PBLとして、ウェアラブルコンピューティングや3D CGを応用した作品や、映像・音楽等のデジタルコンテンツを自らデザインし、実際に作品を制作してパフォーマンスを行うことを目的とした。授業運営では、グループディスカッションを通して作品のコンセプトやデザインを検討した。授業開始時に共立リーダーシップについて説明し、特に他者の意見を尊重して安易に否定しないことを説明するとともに、率先垂範の障害となる恐怖や不安の感じない環境を醸成することに務めた。グループは2・3年生混成となるよう編成し、学年に応じて立場や役割を意識して行動することを促した。5月以降は、マイクロコントローラを使用したLEDの制御実験などを行ったうえで、各グループで作品の制作を進め、必要に応じて教員・助手が支援する形にした。6月から共立講堂での練習を始めて6月末に成果発表会を開催した。その後、発表会の映像を確認して振り返りを行った。

後期は、卒業制作の4年生を中心に、コミュニケーションデザイナー、メイクアップアーティスト、ウォーキングインストラクターによるワークショップを開催し、学生・学科教職員・学外の専門家との協働を通して、共立リーダーシップの修得を目指した。卒業制作発表会は申請者らの4研究室のが主に準備を進めるが、運営には照明や撮影など、被服学科の下級生を中心に広く協力者を取り込みながらプロジェクトを進めた。

◆ 取組みの成果

リーダーシップGP情報交換会 発表資料

https://drive.google.com/file/d/14pcHnwGXEmPSvL59LuYnsLS7EUDBSs00/view?usp=drive_link

YouTube 大学公式チャンネル 2025年度 被服学ゼミナールA・B_04 成果発表会

https://www.youtube.com/watch?v=PvuTiQEFguI&list=PLuE7Xg_waLddgcmGpvgiQeeyE_tKFK7PW&index=2

被服学科 Instagram <https://www.instagram.com/reels/DMIEecIvd7J/>

<https://www.instagram.com/reels/DMw8SWqN2DE/>

活動紹介 <https://www.kyoritsu-wu.net/~texclo/Leadership>

◆ リーダーシップ教育に関する実践

共立リーダーシップの意識づけ、目標設定の活動	前期は共立リーダーシップ実践ガイド、リーダーシップ行動確認シートの内容を簡略化し、具体的な行動を示したスライドを作成して授業開始時に説明した。毎週の活動終了時には、目標の共有・設定、率先垂範、相互支援、包容性について振り返り、自己評価をGoogle Formsに記入するようにした。後期は、共立リーダーシップ実践ガイド、リーダーシップ行動確認シート、リーダーシップ自己評価を活用して、共立リーダーシップを意識するように促した。
協働活動	前期のPBLは、2・3年生が学年を越えて協働するチーム活動の実践を最も重視した。同一学年の面識のある学生だけでまとまった閉鎖的なグループになりがちであるため、包容性、特にオープンな思考で行動するように促した。それでも、2年生だけでまとまる傾向が見られたが、大学院生や4年生の効果的な支援によって円滑なチーム活動を行うことができた。後期は、卒業制作発表会に向けた4研究室の協働と、モデルや照明の演出を担当する下級生と4年生とのチーム活動の取り組みを進めた。Google Formsにしたリーダーシップ行動確認シート、共立リーダーシップ自己評価シートを活用して、活動を評価した。
共立リーダーシップの観点での振り返り	前期は成果発表会后に、全体で記録映像を確認しながら共立リーダーシップの観点の自己評価とチーム活動に関する振り返りを行った。向上の余地はあるがチーム活動は概ね良好に行うことができたようであり、振り返りの自由記述を見ると、2年生は3年生からの学び、2年生は自身の態度や行動に対する内省に関する記述が多かった。後期は、研究室内のサブグループ単位で卒業制作発表会の記録映像を編集をしており、映像を確認しながら振り返りを行っている。報告書作成段階でも映像の編集作業と振り返りを継続しており、検証作業が残る。

◆ 学生の成長に関する総括

共立リーダーシップを構成する4つの観点のうち、まず、チームが崩壊せずに活動が成立するループリックのB・Cの段階について検討した。「包容性」については、異なった意見も安易に否定せずに尊重するなど、比較的受動的な行動として説明ができ、恐怖や不安といった能動的な活動を抑制する要因を取り除くことにつながった。一方、「率先垂範」は能動的な行動が求められるが、「包容性」を意識した行動の促進するとともに、アイスブレイクの活用などにより心理的な抵抗を低減することができる。「相互支援」については、同意の意志表示や同調して行動するなど、中間の状態といえる。これらについては、すでに教材が充実している上に具体例を説明しやすいこと、さらに、PBL経験のある学生の支援もあり、プロジェクトを進めるにあたり大きな問題にはならなかった。

◆ 取り組みを通した全体の所感

行動目標と成果目標という多元的な目標の設定、さらに、個人、チーム・研究室、プロジェクトという階層構造の目標設定の問題がプロジェクトを進める過程で顕在化しており、解決すべき課題となっている。また、担当教職員について「課題解決のためのリーダーシップ入門」で使用されているエニアグラムを調べた結果、学生や助手よりも教員のパーソナリティにも協働を阻害する要因が含まれる示唆された。リーダーシップ教育の強化に向けて、教員間の連携を強化する枠組みを構築し、教学PDCAを強く意識するようにFDを継続することが課題といえよう。

◆ 今後の展開

今年度の振り返りを参考に次年度もPBLによるリーダーシップ教育のPDCAを継続する。活動と成果、個人・チーム・プロジェクトという多元階層構造の目標の設定と共有は、次年度に取り組みたいテーマである。